

## 表現の型の修得

向嶋成美

文芸・言語学系教授 第二学群長

『筑波フォーラム』61は、「日本語力を考える」のテーマで特集が組まれた。

私は初め編集委員のかたからこのテーマを聞いた時、特集の誌面が学生諸君の日本語能力の欠如を慨嘆する論述で埋めつくされるのではないかと危惧し、率直なところ書評は気が重かった。しかしそれは全くの取り越し苦労であった。執筆陣の関心は学生諸君のそうした面をことごとしくあげつらうことに向けられるのではなく、むしろ今後の教育のあり方に向けての示唆に富む発言が多く見受けられたからである。

この特集のもとに寄せられている論説は全部で12編、日本人学生を対象とする教育に実際に携わる立場からの意見を主としながら、外国人学生にとっての日本語の問題を取り上げるもの、さらには情報化時代における日本語表現の問題に及ぶものもあって、なかなか多彩な内容であった。その中、印象深いものをいくつか挙げるならば、川崎晶子氏の論はご

自分の言語に関わる授業実践を踏まえての意見が述べられているのだが、学生が自分で発想する力を育てることの必要性を説く。日本語教育が諸科学研究の共通の基盤ともいべき発想する力を育成する役割を担うとの考え方は十分に傾聴に値しよう。また金子秀敏氏の論は、「作文」と「論文」とが別物であることを明快に述べていて、教えられるところが多かった。ジャーナリズム志望の学生諸君には是非一読を勧めたい。

現代の学生諸君の日本語表現に対して違和感を覚えるというのはよく耳にするところであるが、それを「共同規範性のゆらぎ」という考え方で捕えた伊藤益氏の論もまた刺激的であった。言葉は本来変化し続けるものであって、それを支える「共同規範性」についての理解に差が生じるというのは尤もである。しかし私はあえていえば、学生諸君には自分を是非一度過去の優れた規範の中へ追い込む努力をしてほしいと思う。寺田寅彦でもよいし、幸田文でもよい。日本語の名手はいくらもいる。そうした人の文章をじっくりと学んで表現の型を一度身につけることを勧めたいのである。型の修得は学習のある段階では相当に意味あることと私は考えている。

(むこうじましげよし 中国文学)